茨木版共創には4つの要素があります

Communication　ひらく

まずは対話と参加。そのためには、プロセスをひらいてみよう。大事なポイントは、「意見を言う」、「意見を聞く」ではなく、「一緒につくりあげていく」こと。

Collaboration　一緒に

スキルを持ち寄る足し算から、価値を生み出す掛け算へ。「適材適所」も「混ぜこぜ」もありだけど、「混ぜこぜ」のほうがおもしろいかも。

Cheerful　楽しい

きっかけは「課題」じゃなくて「やりたいこと」でもよし。なんなら誰かの「やりたい」に乗っかってみるのもあり。「楽しい」なら続くし、「お客さん」から「自分ごと」に意識が変わっていくかも。

Challenge　お試し

最初から完璧を目指さなくても大丈夫。まずは小さく試してみよう。そんな試行錯誤の中から新しいアイデアが生まれるかも。たくさん考えるのも大切だけど、ノリと勢いの「とりあえずの行動力」も大事。

4つの要素をより深め、広げ、つなげられるのが
「プロセス」と「共感」です。

プロセス

プロセスに関わることで、「誰かが決めたこと」ではなく「自分ごと」に。プロセスを通じて関わる主体同士の信頼関係、相互理解にもつながります。

共感

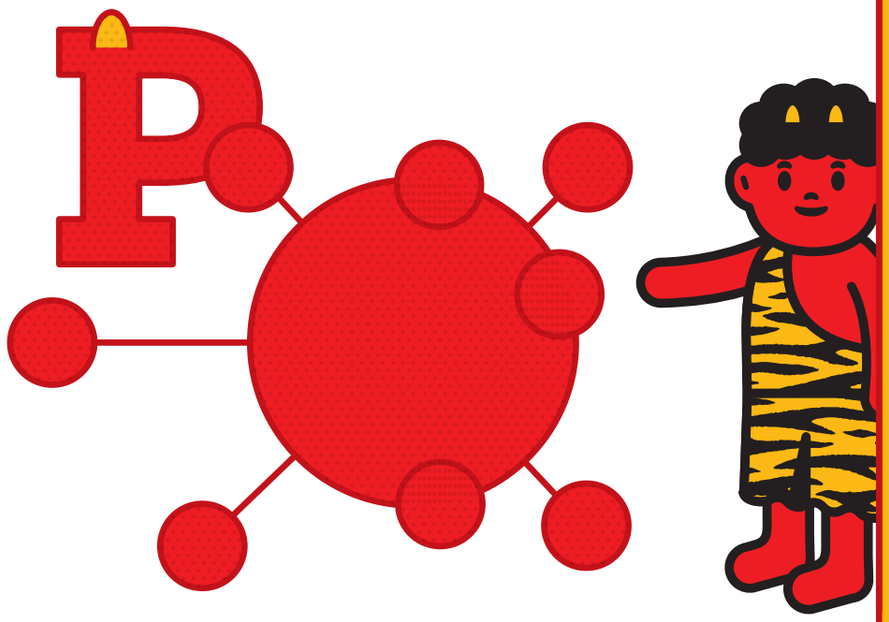
同じ場を共有する時間、手を動かす共同作業、身体を通した経験が積み重なることで参加者同士に物語が生まれます。

ひらかれた対話の場があるから途中参加しやすい	Communication ひらく	共感があるから対話がひろがり、深まる
プロセスを共有することで信頼が育つ	Collaboration 一緒に	共感し合う混ぜこぜから新たな価値が生まれる
一緒に積み重ねることで楽しさを倍増させる	Cheerful 楽しい	独りよがりではなく、みんなが楽しいになる
試行錯誤の流れそのものが価値になる	Challenge お試し	共感があるから新しい挑戦に仲間が増える

茨木版共創のカタチ

茨木版共創の取り組みには、どのようなカタチがあるのでしょうか。
これまで茨木市で実施してきた取り組みを、目的や関わる人、
組織などによって分類した4つのカタチでご紹介します。

プロジェクト型



例えば、まちの魅力や活動を記事として発信する「まちみレポーター」。ベースとなるプロジェクトや取り組みに、市民や学生など、様々な主体の参加を募り、一緒に進めるカタチです。参加者はチームというよりパートナー。共創を「始める」のにちょうどいいカタチで、うまく続くとプロジェクトに対する共感が広がったり、参加者同士のネットワークづくりにつながったりすることも。このタイプを進めるコツは、同じ方向に進むための「ゴール設定」と、参加者の「関わり代」を残すこと。余白があることで参加者のモチベーションがあがります。

※イラスト中の●は、参加する個人や団体、組織を表現しています。

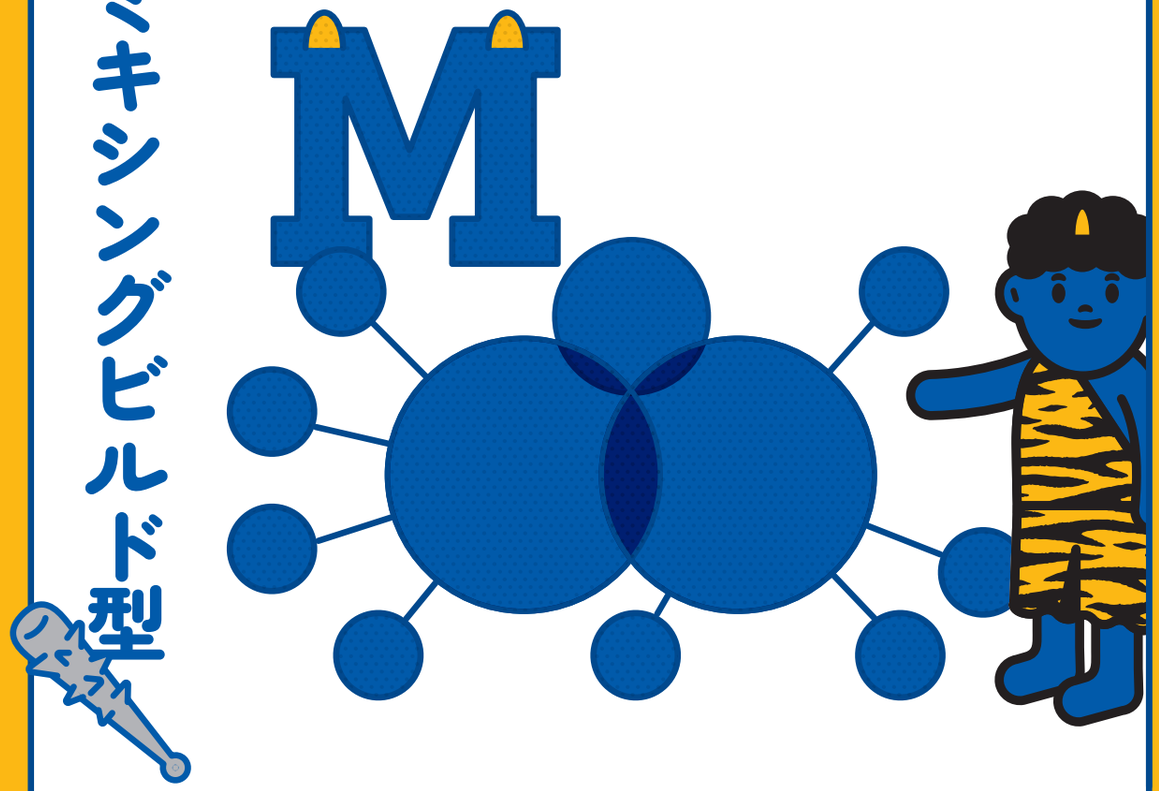
まちみレポーター

「茨木が好き！」「茨木の魅力を発信したい！」と、市内外から集まった人たちで構成されるPRチームです。文章講座など複数回の研修を受けたレポーターがまちの魅力を取材し、市と協力してSNSなどで発信しています。地域のイベント、お店、地域団体の活動、人々の思いなど、自分の視点で伝えたいと感じた様々なテーマを取材対象にしており、レポーター同士のつながりから、共同での取材・投稿など新しいアイデアも生まれています。

就農支援塾あぐりば

市内で農業を担う新たな人材を育成することを目的に、2024年度から新規就農を支援する学びの場をつくりました。一定水準の技術と知識の習得を経て、農地の斡旋を受けられる「地域農家候補者」に登録することができ、あぐりばでは営農技術だけではなく、マーケティングや地域との関わり方など幅広く学ぶことができます。行政は卒業生を庁内関係課に紹介したり販路を開拓する機会をつくるなど、必要な人や情報をつなぐコーディネーターとして関わっています。

ミキシングビルド型



例えば、DJ×盆踊り×芝生広場から生まれた「芝のみ盆踊り」。教育×エンタメ、アート×福祉、農業×大学生といった、異なるジャンルの活動がコラボレーションし、交じり合ったところで既存の取り組みにはなかった新しい価値が生まれる（かもしれない）カタチです。子育て×文化のおにクルみたいに、一見、混じりそうにないジャンル同士の方がおもしろい展開につながることも。このタイプを進めるコツは、それぞれの「得意を重ねる」柔軟さと、異なるジャンルをつなぐ「間の人」。

※イラスト中の●は、参加する個人や団体、組織を表現しています。

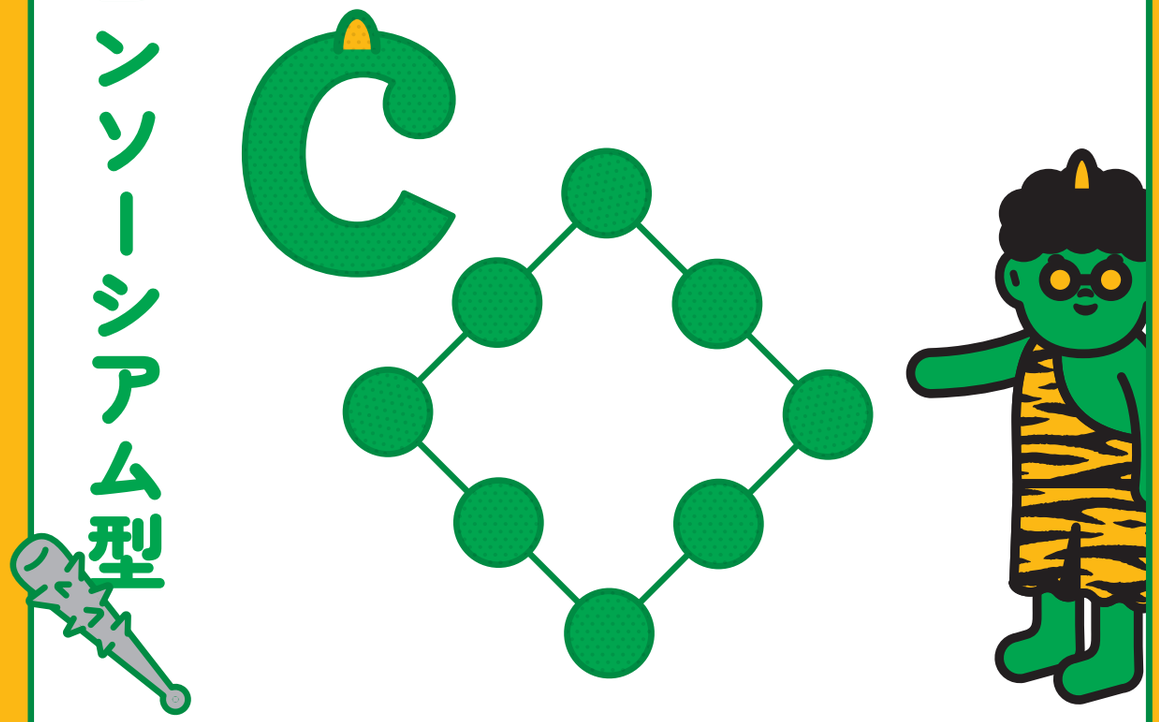
おにも見にクルアート展

これまでは、人権・男女共生課で「ダイバーシティアート展」、障害福祉課で「手づくり作品展スペシャル」、障害福祉センターハートフルで「アールブリュット展」、地域活動支援センターで「ちかつアートフェスタ」を実施していましたが、おにクル開館をきっかけに、障害者週間と人権週間である12月上旬、4つの展示を一緒に開催しました。連携することで、展示する作品集めもスムーズに進んだほか、福祉事業所の参加により、アートによる社会参加と啓発、福祉的就労の工賃向上にもつなげることができました。

芝のみ盆踊り（IBALAB@広場）

IBALAB@広場で活動していた茨木コモンズと、コロナ禍で中断していた盆踊りを復活させたい盆踊り団体を、広場のコーディネーターがつないだことで実現したハイブリッドな盆踊りイベント。普段は接点のないDJと盆踊り団体が出会うことで、提灯や櫓（やぐら）といった和の風景に、デジタル機材に囲まれたDJブースが融合。浴衣姿の老若男女がポップな音楽に合わせて芝生で踊る、これまでに見たことのない特別な光景が生まれました。

コンソーシアム型



例えば、竜王戦の開催に向けて、行政、市民団体、事業者が集まって様々な取り組みを展開した「竜王戦実行委員会」。共通の目的のため各主体がリソースを持ち寄り、実行委員会や産官学連携のようなチームをつくって進めるカタチ。特徴は、それぞれの「得意を活かす」スタイル。このタイプを進めるコツは、ハブとなる事務局のファシリテーションと、参加意義の共有（見える化）。目的（ゴール）を共有するのはもちろん、取り組みのプロセスも共有して、参加している全員が自分ごとになることが大切です。

※イラスト中の●は、参加する個人や団体、組織を表現しています。

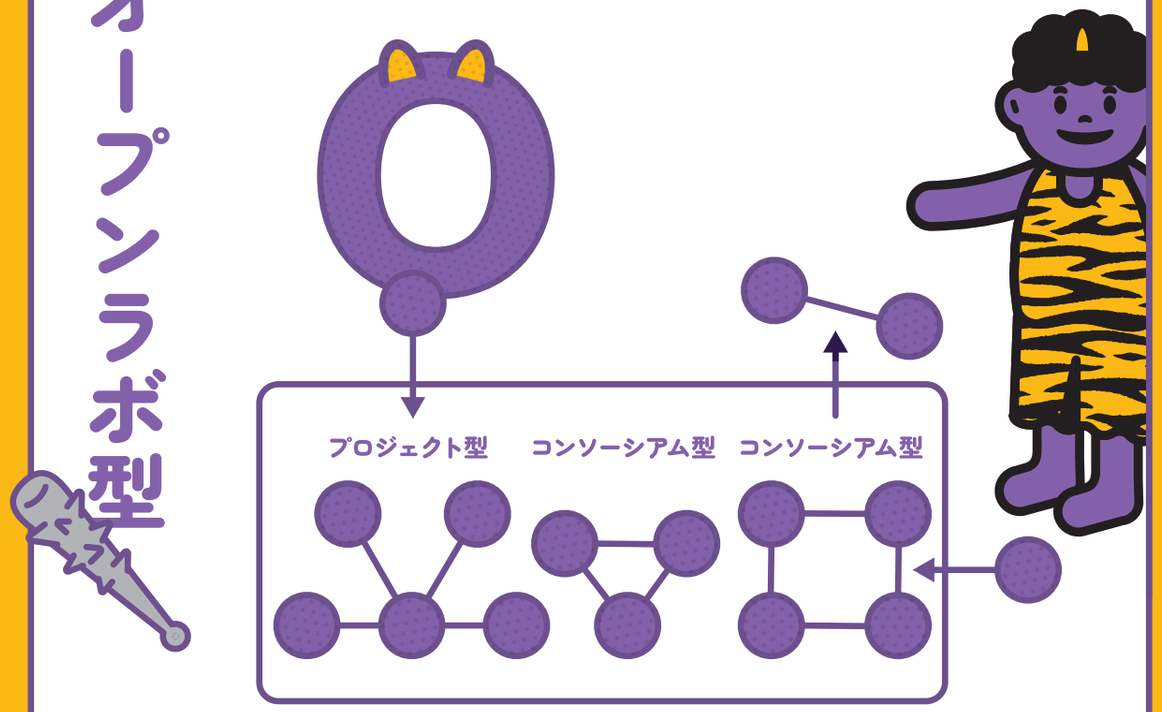
竜王戦実行委員会

竜王戦開催に向けて機運を盛り上げるため、勝負めしプロジェクトや縁台将棋、映画鑑賞、トークイベント、竜王戦にちなんで、竜王山をはじめとした「いばきた」を巡るツアーなど、様々な関連イベントを実施しました。事務局の文化振興課だけではなく、様々な課や対局会場であるおにクルの各機能、日本将棋連盟茨木支部、茨木商工会議所、茨木市観光協会、文化振興財団といった多様な主体が連携しながら、それぞれの強みを活かして幅広い企画を実現しました。

IBARAKI CONTEMPORARY ART WEEKS（ICAW）

これまでそれぞれに実施していた現代アート事業「現代美術―茨木」「HUB - IBARAKI ART PROJECT」「SOU – JR総持寺駅アートプロジェクト」「茨木映像芸術祭」を、閉館が決まった福祉文化会館の全館を活用した合同の展覧会として開催しました。各事業の強みを活かした事業展開に加え、海外アーティストが参加したこともあわせて話題をよび、人・表現・活動・作品が集まる「場」が生まれたことで、市内外問わず多くの方がアートにふれられる機会となりました。これまで各事業が育んできたものや人・活動が掛け合わされることが、共創による新たな価値の創造に向けた一つの足がかりとなりました。

オープンラボ型



例えば、「IBALAB@広場」の社会実験。テーマ設定された「場」において、参加者がみんなで考え、試し、つくり上げていくカタチ。「場」の中で参加者のやりたいことを実現してみたり、「場」を介したコミュニティが生まれたりすることもあります。何をやるかというところから考えるのですが、考えるだけ、交流するだけで終わらず、何かしらの実践を生み出す場であることが大切です。実践が始まると、取り組みの内容によってプロジェクト型やコンソーシアム型などが生まれることも。このタイプを進めるコツは、柔軟な発想や小さなお試しを許容するしくみや雰囲気づくり。そのためにコーディネーターを置いたり、「場を開く」ことがポイントです。

※イラスト中の●は、参加する個人や団体、組織を表現しています。

このカタチに分類される取り組み

みちクルプロジェクト

市の中心部により多くの人が訪れ、滞在し、活動したくなるような“まちなか”を目指してメインストリートを魅力的にしていく取り組みです。コンセプトは、「手をつないで歩きたい、茨木まちなか」。メインストリートである中央通りにおいて、JR茨木駅前商店街の前の「みち（側道）」をモデル整備区間として、社会実験を開催しました。沿道の店舗と協力し、駅前商店街を歩行者天国にした「ナイトバル」の開催や、新たな魅力づくりのため、取り組みに興味がある人や事業者、大学生と協力して、空き店舗の活用やストリートファニチャーの制作などにチャレンジしました。

IBALAB@広場

市民会館跡地エリア活用基本構想で示したキーコンセプト「育てる広場」の実現に向けて、芝生広場を市民とともにつくり、育てる様々な取り組みを実験的に実施しました。みんなで芝生を張る、ベンチをつくるなどハード面だけでなく、使い方についても市民と話し合いを重ね、広場のルールなどにも反映しました。音楽やマルシェ、スケボーや花火など、楽しみながらみんなで「つかう」と「つくる」を試してみて、少しずつ「できるルール」を増やしていく広場のサイクルは、現在のおにクルの運営スタイルにつながっています。

カタチは変化していく

前期

100人会議（プロジェクト型）

中期

IBALAB@広場（オープンラボ型）

後期

オープニングイベント実行委員会
（コンソーシアム型）

共創の取り組みは、段階によってカタチが変化していきます。例えば、市民会館跡地エリア活用（おにクル整備）のプロセスでは、まずは市長と市民との対話の場をつくり意見交換した100人会議（プロジェクト型）から始まりました。その後は開館までの実践の場として市民が自由に活動でき、様々な実験的な取り組みを行うIBALAB@広場（オープンラボ型）を生み出し、おにクルの開館時には、市民主体のオープニングイベント実行委員会（コンソーシアム型）を立ち上げ、みんなで開館をお祝いしました。その時々の状況や参加している主体によって、合致するカタチを選択することが大切です。

ここからは茨木版共創の取り組みを詳しくご紹介します。

前半では２つの茨木版共創の取り組みについて、４つの要素がどの段階で意識されていたのか、プロセスと共感を大切に進めた経過がわかるように、料理のレシピのようにまとめました。
後半では取り組みに参加した方々にインタビューを行い、それぞれの立場での気づきや変化などをまとめました。